

忘れられた叡智を求めて

第9回

四月二十八日、東日本大震災と直後の大津波で亡くなられた無数の方々の「四十九日」を迎えた。

すでに、四月十一日に「復興構想会議」も発足し、世間の注目を集めながら活動を開始したこと、被災地を見つめる社会の眼差しは、「復旧」から「復興」へと、徐々に移りつつある。

そして、史上空前の甚大な被害を受けた被災地を復興するためには、破壊された社会インフラを復旧し、生活に必要な物流網を整備し、日々の経済活動を立て直すという意味での「経済の復興」が、まず最初の困難な課題として立ちあがっている。

しかし、一方で、我々が決して忘れてはならない、もう一つの「復興」がある。

「経済の復興」から「心の復興」へ

「心の復興」である。

すなわち、この大震災と大津波によって、愛する肉親や家族を失い、親しい友人や知人を失われた方々は、その悲しみや辛さを心の奥に抱きながら、いま、被災地や避難地の片隅で、その心が癒されるのを待ち、精一杯の思いで日々を過ごされている。

そして、この悲しみや辛さは、たとえ「経済の復興」が成功裏に進み、元の生活に戻ったとしても、容易に癒されるものではない。

そのことは、阪神淡路大震災から十年を経た時点での被災者の方々へのアンケート調査を見れば明らかであろう。

十年の歳月を重ねても、「震災で受けた心の傷から癒された」と答えた方は、まだ六八%にとどまっている。

この数字は、東日本大震災の規模と惨状を考えるならば、さらに少なくなることは明らかであろう。

そして、この事実が我々に求めているのは、復興に向けての取り組みの中に、いかにして「心の復興」を支援していくかの方法を、明確に位置づけることである。

しかし、この方法には、経済復興と異なり、「斬新なアイデア」などは無い。求められているのは、実は、古くからある人間の叡智であろう。

例えば、こうした大災害によって無数の方々が命を失われたとき、古来、大切にされてきたことがある。

「鎮魂」である。

亡くなった方々の魂の安らぎを祈り、残された者たちが行く鎮魂の営み。それは、亡

くなった方々の魂のためだけにあってはならない。残され、悲しみに沈んでいる我々の心が癒されるためにこそ、大切なものである。

先日の復興構想会議において、建築家の安藤忠雄氏が、「鎮魂の森」という構想を語られた。多くの被災者の方々が、亡くなった肉親を思い、知人を偲び、心を込めて植えていく一本一本の木。その木々が、あたかも亡くなった方々が蘇ってくるように、大きく育ち、緑の葉を茂らせ、人々に安らぎを与える深い森となっていくとき、残された我々の心にも、安らぎが訪れるのである。

「鎮魂」。

我々にとつての真の復興は、その一点から始まるのかもしれない。



田坂広志

[内閣官房参与
多摩大学大学院教授]